

ゴルフの旅人

クラブを持てば世界は友だち

第13回

アイルランド・西海岸(編)

バリーバニオンとラヒンチ。妖精のいたずらに翻弄された

取材協力:アイルランド政府観光庁
(www.discoverireland.jp)

Nishimura Kunihiko

1947年生まれ。東京大学卒。弁護士。プレーヤーの立場からゴルフ場再生に取り組んでいる。04年ニューセントアンドリュースGC日本のクラブチャンピオンに。現在はHC3



風に向けてグリーンを外すとこのありさま。バリーバニオン恐るべし



バリーバニオンは17番で再び海辺に出る。美しい浜に向かうティショットには翼が



ラヒンチの最高地点9番ティからはゴルフ場全部が見渡せる。これは8番のグリーン



ラヒンチのトレードマークのヤギ。ヤギが小屋に避難し始めたら、大荒れの天気になる



ラヒンチでただ一人のアメリカ人キャディ。ということは、アメリカ人No1キャディ

バリーバニオンとラヒンチ、どちらも日本から見れば、地の果てアイルランド西海岸にあるクラシックリンクスの代表。日本からは遠くても、アメリカからは大西洋をひとつ飛び、アイルランドは、現在の急成長からは想像しにくい飢饉時(注1)に新大陸に渡った移民たちの祖国だから、どちらのコースもアメリカ人で混んでいる。大きなクラブハウスが不釣り合いだが、ともに36ホールのゴルフ場(注2)だ。バリーバニオンがプレーできる日を確認してから日程を組んだので、アイルランドを横断して夜遅くゲストハウスに着く。現地の人にヘリコプターの必要なスケジュールと笑われたけれど、バリーバニオン・オールドでプレーできるなら、徹夜で運転しても来るよと言いかえしてやった。同行したのはイタリアから来た若者ルーカ。生意気に黒髪美人のガールフレンドもつれてきた。イタリアのゴルフも少し盛んになったらしく、肩を豪快にまわす本格的スウィングでもバリーバニオン向きではなかった。6番グリーンあたりから本格的リンクスコースが牙を剥く。とたんに風が強くなり、時に雨も混じると、たった数十ヤードのアプローチが、風とグリーンの傾斜で、まるで綱渡りの

トソン(注3)が世界一タフなホールと評したのを裏付けるかのように、雨と風が荒れ狂う。ルーカの高いボールは遙か砂山の上に消える。我々は海にボールがたたき落とされるのを防ぐのに精一杯。地をはうようなボールでグリーン手前まで運ぶしか

見守られながら、ティオフ。そうだが、ここは、私の旅の始まりであるサイプレスポイントを設計したA・マッケンジーが手を入れたコース(注4)だったことを思い出す。気づいたときはもう絶え間なく吹きすさぶ風の中。3番の長いアゲンストのパー



イタリア人ルーカの豪快なショットは、リンクスの風の餌食。でも彼女がいれば……

翌日午後四時過ぎ、ようやく噂のラヒンチ・オールドコースをスタート。地元の会員メンバーと酔いどれキヤディがついてくれ、トレード

4で奇跡的に3がきたが、すぐ問題のブラインド・ホールがきてしまう。4番は以前の5番で、クロンダイクという砂山がパー5のセカンドショットの前に立ちちはだかる。次の5番デル(昔の6番で小谷の意味)は、反対方向にまた砂山越えのブラインドパー3。ピンの位置は小山の中腹にある白い石が教えてくれる。でもグリーンに行ったらボールが忽然と消えていた。ここから2、3ホール妖精がいたずらを続け、ロストボールの連続。今回のラヒンチは機嫌が悪かった。マッケンジーには悪いが、もう少し勉強してから出直すことにし、海と川に囲まれたゴルフ場の景色を楽しむことにした。でもあの2つのブラインドホールに毒気を抜かれ、わたしはマストが折れた小舟になって、ラヒンチをさまようばかり。まだまだ死ねないぞ。



注釈:①アイルランドは英国からの独立運動の過程で、1845年ころから大飢饉に苦しんだ。②ともにオールドコースのほか前者にはR・T・ジョーンズのCASHEM、後者にはCASTLEがある。③バリーバニオンは、1981年T・ワトソンが発見したためアメリカ人が殺到するようになった。④ラヒンチは最近4、5番のトム・モリスホール以外をマッケンジーの原型に復活させた